

Title	ひきこもり経験者の語りに関する一考察：エリクソンの「アイデンティティ」概念を手がかりに
Author(s)	桜井, 利行
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 223-234
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6900
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ひきこもり経験者の語りに関する一考察

—エリクソンの「アイデンティティ」概念を手がかりに—

桜井利行

【要旨】

近年、社会的活動や人間関係から身をひき、長期間にわたり自宅に閉じこもる青年が増加しており、「社会的ひきこもり」として問題となっている。本稿では、社会的ひきこもりを経験した5人の人たちへの聞き取り調査を行い、引きこもっていた人々が回復の過程でどのような葛藤を抱くのかを検討した。検討に際しては、エリクソンによる「アイデンティティ」の概念を手がかりとした。考察の結果、ひきこもりは、アイデンティティ形成をめぐる危機として捉えられるのではないかと考えられた。ひきこもりとアイデンティティの形成は、とくに次の三つのテーマにおいて関係していた。(1) 青年期心性：ひきこもり経験者は、たとえば大学での科目を自分で決定するといった、選択や判断をめぐる困難を抱えていた。(2) ライフサイクルにおける世代連鎖性：ひきこもり経験者は、他人から育てられるとか他人を育てるといったような縦の関係ではなく、相互に刺激しあえるような横の関係を、人との繋がり方において志向していた。(3) 周囲からの意味づけ：ひきこもり経験者は、他人から否定的に意味づけられる体験によって自己像が傷つけられており、そうした状態から肯定的な自己像を回復させようと努力していた。以上の三点が、ひきこもりからの回復の過程で現れてくる、アイデンティティ形成に関連した特徴として指摘された。

1 問題と目的

近年、社会的活動や人間関係から身をひき、数年から、長いものでは数十年にわたり自宅に閉じこもる青年が増加しており、「社会的ひきこもり」として問題となっている。ひきこもりについては、問題の性質上、その実態や背景が十分には把握されていなかったが、最近になってようやく問題が広く認識されるようになり、回復のための取り組みや、研究報告が行われるようになってきた。筆者は、こうした社会的ひきこもりを経験した人たちから、直接話を聞かせてもらえる機会を得た。本稿は、そうして行われた聞き取り調査をもとにして、引きこもっていた人々が回復の過程でどのような葛藤を抱くのかを検討しようとするものである。検討に際しては、アメリカの精神分析家、Erik H. Erikson (1902 - 1994) による「アイデンティティ (identity)」の概念を手がかりとした。エリクソンは、人間の一生を8つの発達段階 (developmental stages) に区切り、それぞれの段階にはそれぞれに乗り越えられてゆく課題があるとしている。その中で、青年期に生じやすい葛藤を理解するため用いられたのがアイデンティティという概念である。エリクソンはこの概念を中心としながら、職業選択の遅延や、存在感の曖昧さといったテーマを扱っており、引きこもる人々の心理を理解するのに適当な概念ではないかと考えられる (小此木, 2000; 近藤, 2001)。もちろん、それぞれのひきこもりのケースには個別性があり、これまでの研究では、ひきこもりに多様な背景があることが示されてきている (桜井, 2002)。しかし、アイデンティティといったような一つの観点を定めてひきこもりを一般的に理解していく姿勢も大切であろう。本稿では、ひきこもりを経験した人々の語りの中に共通してみられるテーマとして、アイデンティティの概念を取り上げてみることを試みた。

なお、社会的ひきこもりとは、一般的には「二十代後半までに問題化し、6ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が続いており、ほかの精神障害がその第一の原因としては考えにくいもの」(斎藤, 1998) とされる。ここにある「ほかの精神障害」とは、統合失調症、うつ病、強迫性障害、パニック障害などを指すとするのが一般的である。聞き取り調査は、この定義にかつて該当していたひきこもりの経験者に5名に行っている。なお、調査対象者のひきこもりの期間は、最小で6ヶ月、最大で16年、平

均して約6年であった。(表1)

表1 面接調査の対象者

	性別	年齢	ひきこもりの期間
Aさん	男	33才	16年(14才~30才)
Bさん	男	25才	半年(22才~23才)
Cさん	男	31才	1年半(26才~27才)
Dさん	男	25才	11年(12才~23才)
Eさん	男	25才	2年(19才~21才)

聞き取り調査では、ライフヒストリー法(Langness & Frank, 1981)を参考にしながら非構造化面接法を実施した。具体的手順としては、「ひきこもっていた期間を含め、あなたのこれまでの人生について、時間の流れに沿って話してください。あなたがどのような人間で、これまでどのような人生を送ってきたのかを教えてください」という依頼をした。聞き取りに際しては、被面接者ができるだけ自発的・主体的に話題を選びながら話せるよう心がけてインタビューを行っている。本稿では、これらのインタビューの中から特に、引きこもっていた人々が回復の過程でどのような葛藤を抱くのが理解できる箇所を中心に紹介している。

2 エリクソンによるアイデンティティ理論

(1) アイデンティティの定義

青年期は自己意識を再統合する発達段階であり、エリクソン理論においては自我同一性(ego-identity)の形成が問題とされる。エリクソンは、アイデンティティという用語をさまざまな文脈の中で用いており、たとえば、「個人の独自性に関する意識」、「体験の連続性を求める意識的努力」、また、「集団的理想像との連帯」など、幅広い視点から理解されねばならないものである。しかし、自我同一性という言葉を使うことによってエリクソンが第一に意図したことは、「自我」の働きを中心として人間理解を深めていこうとする姿勢であった。この、「自我」という言葉は、たとえば「自我の芽生え」といったように日常的にも使われるものである。自己主張を始めるとか、自分の意思を持つようになったというぐらゐの意味であろう。エリクソンがアイデンティティという概念を用いることによって特に関心を払っているのは、青年期における自我の働きである。エリクソンは自我同一性の感覚を定義するに際して、児童期と青年期の違いに言及しながら、次のように述べている。最初に、エリクソンが自我同一性の感覚をどのように定義しているのかを確認しておこう。

「自我同一性という形で、まさに行われようとしているこの統合は、児童期の種々の同一化(identifications)の総和以上のものである。むしろそれは、うまくいった同一化が各個人の基本的な欲動と、自分の素質や機会との結合に成功する際に、次々に継起する各発達段階の諸要素すべてから獲得される内的な首府である。精神分析では、このような成功した結合を『自我総合』に帰する。今まで私は、児童に生まれた自我の諸価値が、自我同一性の感覚と私が呼ぶものの中で頂点に達することを明らかにしようと努めてきたが、この時に体験される自我同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力(心理学的な意味での個人の自我)が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに

合致する経験から生まれた自信のことである」(Erikson,1959,邦訳112頁)

人はさまざまな素質をもって生まれ、家族の中で育てられ、地域の人々と交わり、多くの経験を重ねながら一人の人間として成長していく。そうした過程における多くの経験が青年期に統合され、一つのまとまりある自分という感覚が生まれてくる。エリクソンは、このような感覚を自我同一性の感覚とした。しかし、その感覚は、「他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する」と述べられているように、個別的な存在としての自己と、社会的な存在としての自己の統合という視点を含んでいる。たとえば、これまでの自分自身を振り返って将来を考えると、自分らしさをいかにしながら社会の中で生きていくにはどうすればよいのかといった悩みが青年期に生じることがあるが、こうしたアイデンティティの統合の困難さを現している。次の発言は、あるひきこもり経験者が、他の引きこもる人たちと接した感想を述べたものであるが、自我の統合をめぐる、このような難しさが表現されている。

「だから、非常に偏った才能がある。既存の社会の中ではなかなか居場所を見つけにくいんだけど、よく見てみると、非常に、社会的に有効化することはできないのだけれども、その人はその人独自の才能があるなって人が多いのは感じますね」<もし、引きこもっている人たちに、こんな才能もあるよって教えてあげられるとしたら、何を言えそうですか？>「それは、千差万別というのか、臭いに非常に敏感だったり、音に非常に敏感だったり、人の発言に敏感だったり。だから、それが、どういうふうにすれば社会的に有効な場所を見いだせるかっていうのが、まだちょっと分からないんです。課題ですね」(Aさん)
(<>内は調査者の発言。以下同じ)

この発言は、他人のひきこもりについて述べられたものだが、被面接者が自分自身に感じていることを述べたものとも理解できる。葛藤の内容をすこし一般化すれば、「自分には能力があるが、社会の中で活かさない」というものである。この語りの特徴として指摘できるのは、社会の中で生きていきたいという欲求が表現されている点と、偏っていても何か自分にも才能があるという自信が表現されている点である。もし、社会への適応を全く諦めてしまうか、あるいは、自分には何の才能もないと割り切ってしまうと、このような葛藤は小さくなるのかもしれない。しかし、社会に適応することと、個人の才能を発揮させることのバランスを保とうとする結果として、葛藤が生まれている。先に述べたように、エリクソンのアイデンティティ概念には、個別的な存在としての自己と、社会的な存在としての自己の統合という視点が含まれていたが、このひきこもり経験者の語りの中に現れていた葛藤も、外側からの要請に応えようとする欲求と、内側からの要請に応えようとする欲求の間に生じていたということができる。ひきこもりに伴う葛藤の一つは、このような、社会の中に自らを位置づけられないという意味での、アイデンティティの問題に根ざしているといえるだろう。

(2) 同一性拡散症候群

「自分がない」という表現があるが、ひきこもり経験者の中にも、このような感覚を自覚している人々がいる。次に、このような自己喪失感について、アイデンティティの観点から考えてみよう。あるひきこもり経験者は、他のひきこもりの経験者と出会ったことで、「自分自身の基準のなさ」に気づかされたとして、次のように語っている。このようなひきこもり経験者は、「自分のなさ」というものを、どのように感じているのだろうか。

「僕は、他のひきこもりの人と違うのは、ひきこもりの人って、やっぱ、独特の感性を持っているじゃないですか。自分と合わないとか。自分の世界観とか、ちゃんと持っている人が多いじゃないですか。僕の場合は、世俗の、要するに大多数の考えがまだ抜けきってないんですよ。その点は、いろいろ自助グループ行って、分かりました。ちゃんと大学卒業して、まっとうに働くのが普通の人生だっていうことが抜けきれないんですよ。方向転換がなかなかできない」<なんて言うんですか、自分にとっての価値観とか、自分の美意識とか>「ないんです。自分の基準がないんです」(Bさん)

多様な価値観をもった人々との出会いを通して、「自分のなさ」を感じ始めるようになったようである。この語りに表現されていた「自分のなさ」についての葛藤をすこし短くしていえば、「世間一般の価値観

から抜け出せず、自分の基準がない”というものである。特徴として指摘できるのは、一般的な価値観に従って生きること疑問を感じ、自分には独自のものが不足しているのではないかという問題意識が表現されていることである。このような葛藤は、先のAさんの語りにおいて表現されていた、“自分には能力があるが、社会の中で活かせない”という葛藤とはやや異なっているだろう。つまり、Aさんの場合は、独自の能力があるが社会の中でいかせないと述べ、Bさんの場合は、自分に独自のものが不足しており将来の生き方が見つけられないと述べていた。このように、自分が独自の存在であるという感覚は、過剰となれば社会からの孤立感に苦しめられ、逆に、独自性の感覚が希薄となれば、生きる方向性が定まらないという苦しみを抱くのであろう。

エリクソン(1968)は、このように、自分とは何かといった意識が過剰になったり、自分の将来を決定できなくなって生活全般が無気力となったりする状態を、「同一性拡散症候群(identity defusion syndrome)」と呼んでいる。ここでは、エリクソンによるアイデンティティ概念を、もう少し詳しく知るために、同一性拡散に関するいくつかの重要な側面を、発達の観点から掘り下げてみよう。

エリクソンの発達理論では、人間の一生が8つの段階に分けて考えられている。その中で、青年期の直前の段階で課題となるのは、学童期の「課題同一視」である。課題同一視とは、勉強であれスポーツであれ、課題を達成する喜びを通して他人の考えや態度を模倣し、同じように考えたり振る舞ったりするようになる働きを意味している。得意な活動に専念し、大人や仲間集団から評価されたり受け入れられ、そうした過程を通して、身近にいる人々の価値観が取り入れられてゆく。こうした過程を経過すると、自分なりに努力していけば課題をうまく成し遂げられるという体験が積み重なり、「有能感」が育つとエリクソンは考えている。次の語りは、スポーツを通して周囲の人々から評価された経験を、あるひきこもり経験者が振り返ったものであるが、そうした課題同一視を通して有能感の形成された過程と理解することができるだろう。

「体育は、好きやったから」<小学生ぐらいで体育が得意っていったら、それだけで、認められるんですよ>「そうそうそう、小学、中学も、そうじゃないかな、けっこうあったよ、俺は体育ができるから生きてられているんだってのは。それで、ポジションが決まるってのがあるから。そやな、中2ぐらいまでは、とりたてて明るい性格やとも自分では思わんのかけど、明るいなんて言われることは多かったかな。そのころは、人間関係で悩むってことはなかったなあ」(Cさん)

“自分には得意なことがあったので、仲間集団の中でのポジションを得られた”という語りである。有能感というものが、他人から孤立した状態で獲得されているのではなく、集団の中に位置づけられることで獲得されている点が特徴といえる。エリクソン(1968)は、「自分には能力があるのだというあのすべての子どもがもっている感情……(中略)……これこそ、生産的な成人生活への協調的な参加にとって、恒久的な基礎となるものなのである」(邦訳163頁)と述べており、児童期に形成される有能感を、その後の人生での社会参加のための基礎として位置づけている。自分には能力があるという確信が支えとなって、自分は社会の中でやっつけていけるという感覚が生じてくるということであろう。エリクソンの「有能感」という概念には、児童期と青年期を、発達の連続した過程として捉える視点が含まれていることが分かる。

ところで、Cさんの語りには、もう一つの特徴がある。それは、周囲から「明るい性格」と言われたり、人間関係で悩むことの少なかったCさんであるが、悩みのない状態がある時期を境にして変化したという印象を持っている点である。Cさんは、中学二年頃にそのような変化を感じているが、児童期から青年期への移行の時期にあたる。アイデンティティ形成の観点から言うと、児童期と青年期の発達課題は、「同一化(identifications)」と「同一性(identity)」の働きとして区別される。「同一化」の働きとは、周囲の大人や仲間がするのと同じように考えたり振る舞ったりしながら、社会の規範を取り入れてゆく過程といえる。そして、「同一性」とは、このような取り入れたものを総和以上のものへと統合する過程といえる。たとえば、スポーツができるとか、勉強ができるとかいうことの価値を、自分なりに考え直してみる過程と言えよう。他人から取り入れた価値に疑問を抱くようになるという意味では、典型的には両親との葛藤というものもあるだろう。次の語りは、先とは異なるひきこもり経験者が、両親に対して抱いていた気持ちを振り返るものである。

「申し訳ないというか、まあ、やっぱり期待に応えられなかったってことじゃないですかね。なんでも満点近く取らないといけないってのが、常にありましたから」<今でもそういう意識はありますか？>「自覚してはよくわからないですけど、まあ、開き直ってますからね。親の期待通りにはできないから、したくないからっていうのはあるので。十代の半ばで挫折して、十代の後半でもう期待通りにはいかない人間だと自分で思ったというのがありますね」(Dさん)

ここでは、親の期待に対する裏切りの感覚について主に語られている。この語りにも特徴的に示されているのは、親の価値観に従って生きることに限界を感じている点と、親の期待とは異なる生き方をしようとするとき強い罪悪感が伴う点であった。Dさんの場合は、アイデンティティ形成に関する葛藤を、主に親との間に感じていたとすることができる。一方で、身近な大人たちから学んだ価値観を相対化し、将来の生き方を自分なりに模索しようとするとき、親に対する罪悪感をそれほど伴わずに葛藤する場合もある。次のひきこもり経験者は、自分の生き方を決定するのに主体性を求められること自体に、困難を感じた経験について語っている。大学に入学した後、自分一人の判断に基づいて授業科目を選ぶという場面で感じた当惑を振り返ったものである。

「しんどかったですよ。ちょっと選択とかはね。そういうのを考えると怖くてね。科目とかの、そういうのが、だめなんです」<選択科目ってどういうのがあるの？>「たいしたことじゃないですよ。どの先生のやっている授業を受けるとか、その程度のもんならけど。自分が何をにとって良いのかが、不安になるわけですよ。まー、友達とかがいてね、一緒にこういうのやろうとか言ったらね、だいぶマシになるんですけど。結局、大学で何かできないというよりも、その選択するとかいうのが、しんどいんじゃないかなっていうのは、薄々思ってたんですよ」(Eさん)

大学での、選択科目の迷いについて、“他人が誘ってくれれば決めやすいが、自分一人で決められない”ということが語られていた。学業そのものについていけない不安よりも、選択や判断すること自体に対する不安が大きい点に特徴があった。青年期から成人期へと移行するにしたがって、どのような学校に進んで何を学ぶかといった選択に始まり、どのような職業に就き、誰と結婚するのかといった選択など、多くの選択の機会があるだろうが、そうした、自ら選び決めるという場面に向き合わされる自体が、アイデンティティ形成上の大きな困難となっているようであった。

3 アイデンティティとライフサイクル

(1) 危機の肯定的意味づけ

Marcia, J.E. (1964) は、エリクソンの自我同一性に関する理論的概念を実証的に検討する方法として、自我同一性地位 (ego identity status) という概念を提出している。同一性地位という概念は、個人が危機の経験に基づいて自らの価値観を模索した時期があったかどうか、また、そのようにして獲得された価値観にしたがった取り組みをしているかどうか、その二つの観点から個人の自我同一性の状態を理解しようとするものである。危機 (crisis) と、積極的関与 (commitment) と呼ばれる二つの基準を設定した点は、マーシャの研究の特徴であった。エリクソンがこの二点についてどのように言及しているのかを見ておこう。エリクソンは、青年が多くの可能性を持っていることを「多様性」と呼び、そうした多くの可能性の中から一つの価値観を選択することを「忠誠」と呼んでいる。

「なぜなら、青年は、想像できうる限りすべての関係のなかから、しかもその選択の範囲が徐々に縮小してくる関係の中から、人格的・職業的・性的・イデオロギー的なコミットメントを選びとらねばならぬからである。ここにおいても、多様性と忠誠とはふたたび分極化してくる。両者は、お互いに、意義あるもの、生氣あるものにしあっているのだ。多様性感を伴わない忠誠は、強迫観念と退屈の原因となってしまうだろう。忠誠感を伴わない多様性は、空虚な相対主義の原因になってしまうであろう」(Erikson, 1968, 邦訳346頁)

マーシャのもう一つの特徴は、自我同一性地位の測定法として、同一性地位面接法（identity status interview）と呼ばれる半構造化面接法を考案した点にある。これは、「あなたのしようとしている仕事について、家族はどう感じているか」とか、「自分の信仰について、疑問を感じるようになった時があるか」など約20個の質問項目を通して、「職業」と「イデオロギー（宗教・政治）」の領域における危機と積極的関与の有無を確かめる方法である。面接の結果は、同一性達成、モラトリアム、早期達成、同一性拡散という四つの地位に分類される。マーシャは、これらの類型を判定するマニュアルを作成しているのだから、それぞれの類型の特徴を簡単にまとめておこう。同一性達成型と早期達成型は、特定の職業やイデオロギーに傾倒している。両者の違いは、過去の自分の持っていた考え方に疑問を抱いた時期があったか否かの点である。それに対して、モラトリアム型と同一性拡散型では、ある一定の方向で決定的に行動することがない。両者の違いは、傾倒する方向性を決定するための試行錯誤を行っているか否かにある。

マーシャの研究の特徴は、個人がある時点で、どのような生き方をしているのかのみを問題とするのではなく、どのようにしてそのような生き方をするに至ったかに注目した点にあった。たとえば、同じ価値観を信じ、その価値観に従って同じように生きていても、ある人の場合はその状態が簡単に獲得され、ある人の場合には大きな苦労を経て獲得されているかもしれない。このとき、両者が同じような同一性を達成していると言えない、ということである。マーシャは、危機の体験にアイデンティティ形成上の積極的な意味を見いだしていたと言える。つまり、それまで目標としてきたことが達成できないと思い知らされるとか、それまでのやり方では通用しない現実に出会うといった体験の中で、人は生きる意味を考えたり、それまでの信じてきたことが正しかったかと反省したりする。マーシャはそうした経験を、人間の変容する過程と見なしたわけである。あるひきこもり経験者が次のように語っているのは、そうした変容についての自覚と思われる。

「時期、時期で、自分の人生に対するとりくみ方が変わってしまっていて、評価軸が違うんですね。だから、昔の自分から見たら、今の自分なんて冗談じゃないですから。中学校時代の僕からしたら、今の僕っていうのは全く無価値なんで。たとえば、中学校時代に学習塾で一番をとったりするのは、当時の自分からしたらすごいことなんですけども、今の自分から見たら、あんまりたいしたことじゃないって言う。そういうことに価値を置くっていう、ちょっと勘違いしたような状況にあったんだって、マイナス・イメージになるんで。学習塾なんか行かずに普通に学校で勉強やって、スポーツやって、友達と楽しくやっていたらよかったのって、そういう気持ちがあるんで」（Aさん）

ここでは、「評価軸」という言葉を用いて、引きこもる以前に抱いていた自分の価値観を否定する気持ちと、引きこもった後に抱くようになった価値観を肯定する気持ちが述べられている。このような、「ひきこもる以前はこう考えていたが、ひきこもった経験を通して違う考えになった」という語りからは、ひきこもりが変容の過程として機能しているのではないかという視点を得ることができるだろう。変容の過程という視点からひきこもりを見直してみると、ひきこもりは一種の危機の体験として位置づけられる。引きこもる以前に自分の中に取り入れてきた価値観に疑いを向ける経験や、その結果として、自分がどのように考えているのか分からなくなるといった心の揺らぎの経験が、同時に、新たな自分としてどう生きていってよいのかを自分自身で選び出す経験でもあったという、ある種の変容感を生み出していたと考えられる。

（2）アイデンティティとライフサイクル

エリクソンは、ライフサイクル論の提唱者でもある。ライフサイクルの観点から見れば、アイデンティティ形成の時期は、一人の人間の、誕生から死に至る一貫した流れのなかに位置づけられる。つまり、アイデンティティの形成は人生の目的そのものというよりも、人生の流れにおける一つの通過点としても見られるわけである。そうした理解の下では、アイデンティティ形成は、その前の段階に設定される課題の獲得に支えられながら行われる。十分に獲得されなかった課題があれば、時間的展望の混乱、自意識過剰、役割固着、労働不能といった形でアイデンティティの混乱を引き起こすとされる。同じように、アイデンティティの獲得は、青年期以降の発達を支えるということでもある。アイデンティティの獲得が不十分で

あれば、両性的混乱、権威混乱、価値混乱という形をとって、青年期以降の発達課題の達成に混乱を引き起こすとされる。

ところで、ライフサイクル論は、このような個人の発達過程を理解するためにだけに提唱されたものではない。個人主義的な理解とは逆に、前の世代によって生み出されものが、今度は次の世代を生み育ててゆくという、世代の連鎖のなかで発達を捉えようとする考え方でもある。その考え方にしがえば、親子関係だけに限らず、師弟関係、世代関係の中で役割を変えながら送られる一生が、世代連鎖の一環として理解される。親や教師といった前の世代にどう育てられ、後の世代をどう育てる存在となってゆくのかという所に、個人の発達の特徴が現れてくるといえるだろう。そのような意味で、アイデンティティがどのように統合されているかを考えるにあたっては、他人からどのように育てられ、他人をどのように育てようとしているかという点に、目が向けられてよいと考えられる。ここでは特に、エリクソンの「生殖性 (generativity)」の概念について見ておこう。エリクソンは、生殖性に関連して次のように述べている。

「発達の過程を通して、人間は、学習する動物であるとともに、教授する動物にもなってきた。なぜなら、依存と成熟というのは互恵的なものだからである。つまり、成熟した人間は、自分が必要とされていることを欲するものであり、また成熟というものは、世話をしあげねばならぬものの天性によって導かれるものだからだ。したがって、創出性というものは、基本的には次の世代を作り上げ、指導するための関心事なのである」(Erikson, 1968, 邦訳181頁)

エリクソンはここで、子どもは大人からの助けを必要としていること、大人は子どもから必要とされることを必要としていると指摘している。一人の間人は、学び育てられる時期があり、受け継いだものを自分なりに吟味する過渡期の時期があり、青年期を一つの転換点として、次の世代を育てる時期へと移行してゆくとと言える。次の語りは、ひきこもりからの回復途上にある被調査者が、まだ引きこもる最中にある人たちに対して抱く関心を述べたものである。他人から育てられるとか、他人を育てるとかという形とは異なる形で、他人への関心を語っている。

「まだ引きこもっている人に対して、なにか助言できることはありますか?」>「助言って言うと、上下関係になっちゃう、それはおかしっていうことなんですよ。あくまで、横の関係で繋がれるかどうか的大事であって、横のつながりの中で新しい出会いがあったらいいなってだけです。だから、僕は以前は引きこもりで、今は、昔の自分のようだった当事者に対して何か言うとかそういうことじゃないですね。僕自身が横の関係で繋がっていったんで、横の関係ができていけるように、お互いに頑張りたいですね」(Aさん)

Aさんは、自分がひきこもりから抜け出す過程で、横の関係で繋がっていったことが役立ったと感じていた。そのため、まだ引きこもっている人々に対しても同じような形で関係していきたいと考えていた。自分の経験をいかそうとする結果、「上下関係ではなく、横の関係で繋がりたい」という気持ちを抱くようになったとすることができるだろう。アイデンティティ形成との関係で言えば、他人から育てられるとか他人を育てるといったような縦の関係ではなく、相互に刺激しあえるような横の関係を、人との繋がりに方において志向しているのが特徴であった。

4 放棄されたアイデンティティ

自分が何者であるのかをめぐり葛藤は、社会の周辺に追いやられた人間にとってはより深刻な問題である。たとえば、男性中心社会の中での女性や、白人中心主義の中での黒人は、自らの持って生まれたものが社会の中で評価を得られにくい。社会の中で評価を得ようとすれば、自分らしさとは異なるあり方を自分に求めなければならないこともあるだろう。女性の性同一性や、民族同一性は、アイデンティティ研究の中でも主要な領域としてこれまで研究されてきたテーマであるが、それは、これらの者が社会の中で自分らしく生きようとするときに困難におつかりやすく、同一性形成における問題の複雑さを照らし

出すからでもあろう。このことは、エリクソンの同一性概念が、青年期研究という個体発達のプロセスと、歴史的・文化的な文脈の中で人が自己規定をしようとするプロセスの二側面を含んでおり、両者の交点を捉えようとした概念であることとも関連しているだろう。たとえば、エリクソンはアイデンティティの拡大と民族について論ずる中で、Warren, R.P (1965) の著書『黒人のために語るものは誰か』から、次のような引用を行っている。

「わたしはアイデンティティという言葉をつかまえた。それは問題解決にとり鍵となる言葉だ。読者もこの言葉は何回となく耳にしていることであろう。多くの争点がこの言葉に焦点を合わせており、この言葉のまわりで凝縮している。そして、互いに変化しあっている。黒人は、自分が属する世界と国から疎外され、しかも、この新世界の成功第一主義の価値観にとりかこまれている以上、どうすれば自己規定が可能なのであろうか」(Erikson, 1968, 邦訳418頁)

民族同一性の研究が扱った一つのテーマは、民族的・人種的に差別される人生経験を経て、そのような自らの属性をどのように受け入れ、あるいは、拒否するかの葛藤と言えよう。アイデンティティには、性別など自分の意志では選ぶことのできない次元から、宗教・職業・結婚のように自分の意志で選ぶことのできる次元に関連したものまで幅がある。もし、本来もっており、自分から切り離すことのできないものが否定されたなら、その経験は、その後の人生をどのような者として生きていこうとするかの方向に大きな影響を与えるだろう。ひきこもり経験者の語りの中にも、自分の存在自体が否定されたと思われる体験がある。次の言葉は、中学校時代のいじめられの経験についての語りからのものである。

「中学は、女の子に嫌われた。全員に嫌われた。一人のリーダー格に、女の子に嫌われたら伝わるじゃないですか。あいつはきしよい(気持ち悪いという意味)、あいつはきしよいって。中学校に入ってから活発さがなくなりましたね。暗くなっていきましたね」<どんなふうになりましたか?>「小学校の頃とか、『はい』とか、手挙げてたのが、何もしなくなった」<目立つことはしなくなった?>「もう、目立たないように、目立たないようにしました。中学の時はもう、女性意識して喋れない、完全に喋れない。席も隅っこの方がいい」(Bさん)

“自分の存在は嫌われる。そのような自分を隠したい”という気持ちが表現されている。自分は「きしよい」人間だという周囲の者からの意味づけは、意味づけされた通りの自己規定を導くかもしれない。自分の存在は他人から受け入れられないという自己規定の中で、肯定的なアイデンティティを形成できず、認知された否定的側面をないものとしようと試みるかもしれない。同一性をめぐる葛藤は、ある標準に自分を合わせようとした結果として起こる、自己の喪失とも言えるだろう。さまざまな他者や社会との関係の中で、本来の自分らしさを失った感覚が生じてくるのには、こうした過程を想定することができるのではないだろうか。このようなとき、人はどうすればよいのだろうか。エリクソンは、民族同一性の問題を扱う中で、「放棄されたアイデンティティの回復」という見方を提示している。

「いわゆる『放棄されたアイデンティティ』を再獲得しようとして闘っているのである。わたしがこの用語を好むのは、現代の多くの著作に見られるように、それがアイデンティティの完全な不在を仮定しておらず、むしろ、回復すべきものとしてそれを捉えているからなのである。現代の著作においては、それは、何か探求すべきもの、供与もしくは授与すべきもの、創造もしくは捏造すべきものと考えられているが、それだけでは不十分である」(Erikson, 1968, 邦訳421頁)

こうした「放棄されたアイデンティティ」の観点からいえば、ひきこもり経験者の語りにおいて、否定的な自己像を抱くに至った過去の経験と、放棄されたアイデンティティの回復過程が、語りにおける一つのテーマとなり得るだろう。こうしたテーマに関連した語りとして、あるひきこもり経験者は、いじめられた体験を次のように振り返っている。

「なんで、そういうこと自分が言われなあかんかったのかとかね。で、すべてが自分が悪いわけでもないってのも分かったし。まあ、自分が迷惑かけていることもあるし。だけど、それが全部が自分のせいじ

やないってのも分かったし。まあ、自分が、人に言われるのがどうしてやったのかっていうのも、落ち着けば考えられたからね」<そのあたりは、今はどんなふうに思っているの？>「まー、僕が人が怖かったりしていろいろ不安になって言ったりしていることが、人に嫌な気分させたりするってこともある。でも、いじめられたりするの、やっぱり、自分の問題以上に、それだけじゃなくてね、やっぱり相手の言っていることがひどかった」(Eさん)

人付き合いが苦手で、他人を不快にしてしまう要素が自分にあると感じていたEさんは、そうした自分の落ち度から、いじめられると以前は考えていたようだった。他人から排除され、受け入れられなかった経験を通して、このような者としての私は、他者から受け入れられないという、否定的な自己像を形成していたと言えよう。そうした過去を振り返る中で語られたことは、そのようにかつて悪く思った自分を、今はそうは思わなくなったという肯定的な自己像の回復だった。アイデンティティの達成には、このように、自我が違和的に感じていた否定的な自己像を、親和的に受け入れていく過程が含まれていると考えられる。

5 自我の統合という視点

先に、どのような世界観を形成しているかということよりも、どのようにして世界観を形成してきているのが重要であろうと述べた。しかし、ひきこもり経験者が、どのように世界観を形成しているのかと漠然と試みてみても、どこに着眼点があるのかが、まだ明確となつてなかつたようにも思う。これまで見てきたようなエリクソンの考え方をういて言い換えれば、自我はどのようにアイデンティティを統合しようとしているのかとなるだろう。そして、そのような統合の行われた瞬間がどこにあったのかという点が、ひきこもり経験者の語りにおいて最も注目されるべき点ではないかと考えられる。

ところで、エリクソンは、この「自我」という用語を、「自己」という用語とは区別して使っている。自我とは主体としての私のことであり、自己とは客体としての私のことである。客体としての私には、私によって客体とされるとの意味と、他者によって客体とされるとの意味が二つの意味が含まれている。私にとってと他者にとっての、それぞれの意味において客体化され断片化された自己を統合する無意識的な働きが、自我というわけである。そして、エリクソンはそのような自我の働きにおいてこそ、その人らしさというものが見いだされるだろうと考え、その働きが安定している感覚を自我同一性とよんだのである。エリクソンはこうした意図を明確にするために、W・ジェームズによる「人格的アイデンティティ」という概念との違いから、「自我アイデンティティ」の概念を次のように説明している。

「人格的アイデンティティをもっているという意識的な感覚というもの、二つの同時存在的な観察にもとづいている。時間—空間における自分の存在の斉一性と連続性の自覚、および、他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚、である。しかし、わたしが自我アイデンティティと呼ぶものは、存在のたんなる事実以上のもの、いわば、この存在の自我資質のようなものに関連している。したがって自我アイデンティティとは、その主観的局面では次のような自覚である。つまり第一に、自我の総合方法にそれ自体の斉一性と持続性があるという自覚である。この自我の総合方法は自分の個人的なスタイルでもある。第二に、このスタイルが、自分が直接接触する共同体の重要な他者に対する自己の意味の斉一性と持続性とに合致しているという事実の自覚である」(Erikson, 1968, 邦訳56頁)

ここで、エリクソンが第一の自覚として挙げている「自我の総合方法は自分の個人的なスタイル」という点は、先に述べたとおりである。しかし、第二の自覚として挙げている、「このスタイルが、自分が直接接触する共同体の重要な他者に対する自己の意味の斉一性と持続性とに合致している」という点は、何を指摘しようとしたものなのだろうか。最後に、この点に触れておこう。先に、アイデンティティが形成される青年期に、人は選択や決定に迫られることを指摘した。こうした選択や決定は、自分はどこに所属し、誰から認められねばならないのかという問題が含まれていた。そのようにして選ばれた共同体の、選

ばれた意味ある他者にとって対象化された自己が、自分にとって本来的であると感じられる自己との間にズレを生じていない感覚を、エリクソンはアイデンティティの必要条件として指摘したのである。次の、ひきこもり経験者の語りは、自分と社会との間の葛藤に折り合いをつけようとするものであるが、そのように共同体への所属感を持つことの困難を表現しているものとしても、理解できるだろう。

「自分らしく、自分のそういういい部分を生かしてってことを考えたときに、人と関わってというのはあんまり自分らしくなかったりするなって思うんですよね」<自分らしくは関わってないって気がするの?>「人の中に自分があるっていうのが、あんまり自分らしくない。そんな世の中、都合は良くないのかもしれないけど、人とはそんなに関わりがないところでも、自分がやれるだけのものを持っているから・・・それはなんていうのかな、社会のあれからすると、ちょっと、どうかなって思うやり方かもしれないが、自分らしさを取り戻すには一番いいと思っているし、そうすることで、まあ、社会ともやっていける」(Eさん)

ここまでの議論を通して、エリクソンのアイデンティティ概念を、三つのテーマから見てきた。第一には、エリクソンがアイデンティティの問題を、青年期の発達の危機として扱った点に注目した。個人内での発達の危機というテーマから言えば、両親からの心理的な自立や、職業やイデオロギーの選択の問題が、ひきこもりとは関係していた。ひきこもり経験者の語りとしては、大学での科目を自分で決定するといった、選択や判断をめぐる困難が訴えられていた。第二には、エリクソンがアイデンティティの問題を、ライフサイクルにおける世代連鎖性との関連で扱った点に注目した。ひきこもり経験者は語りの中で、他人から育てられるとか他人を育てるといったような縦の関係ではなく、相互に刺激しあえるような横の関係を、人との繋がり方において志向していた。第三には、エリクソンがアイデンティティの問題を、社会や文化の中で扱った点に注目した。ひきこもりとの関係で言えば、ひきこもり経験者は、他人から否定的に意味づけられる体験によって自己像が傷つけられており、そうした状態から肯定的な自己像を回復させようと努力していた。ひきこもり経験者の語りを検討することで明らかにされたのは、ひきこもりからの回復の過程で現れてくる、アイデンティティ形成をめぐる葛藤に、以上の三点が含まれているということだった。今後、こうしたアイデンティティ形成の危機に陥ったひきこもりの人たちが、どのようにしてその問題を克服していくのかを検討し続けていく必要があると考えられる。

<引用文献・参考文献>

- Erikson, E.H. 1959. Identity and the Life Cycle. International Universities Press. 『自我同一性』 小此木啓吾訳, 誠信書房, 1973.
- Erikson, E.H. 1968. Identity: Youth and Crisis. W. W. Norton. 『アイデンティティ』 岩瀬庸理訳, 金沢文庫, 1973.
- 近藤直司 2001. 「ひきこもりケースの理解と治療的アプローチ」 近藤直司編 『ひきこもりケースの家族援助』 金剛出版.
- Langness, L.L. & Frank, G. 1981. Lives: an anthropological approach to biography. Chadler & Sharp Publishers. 『ライフヒストリー研究入門』 米山俊直, 小林多寿子訳, ミネルヴァ書房, 1993.
- 西平直 1993 『エリクソンの人間学』 東京大学出版会.
- 鐘幹八郎他編 1984 『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』 ナカニシヤ出版.
- 鐘幹八郎他編 1998 『アイデンティティ研究の展望Ⅴ』 ナカニシヤ出版.
- 斎藤環 1998 『社会的ひきこもり』 PHP新書.
- 桜井利行 2002 「社会的ひきこもりに関する文献の考察」『大阪大学教育学年報』 7, 202-218.
- 小此木啓吾 2000 「ひきこもりの社会心理学的背景」 狩野力八郎・近藤直司編 『青年のひきこもり』 岩崎学術出版社.

A Study on Talk by Individuals Who Have Experienced Social Withdrawal

SAKURAI Toshiyuki

In recent years, a large number of young people have withdrawn from social activities without keeping company with other persons. They have been called "Social withdrawal". The purpose of this paper is to examine the conflict experienced in social withdrawal through the interviews with five persons about experience in social withdrawal using the concept of "Identity" in Erik H. Erikson's theory. As a result, social withdrawal is regarded as the developmental crisis achieving the identity. Social withdrawal and achieving identity are related in the following viewpoints. (1) As for the adolescent mentality, they have the difficulty in choosing even the course or subject at university. (2) As for the transmission through generations, one of them don't like to take the role of parent rather than the role of friend. In other words, it is not vertical connection but horizontal connection. (3) As for the effect of negative definition by others on one's self-image, they intended to overcome such negative identity and create positive one by themselves.

5